



はじめに

現在、1,000万haを占める日本の針葉樹人工林からの、製材や合単板を中心とした素材生産量は年間1,700万 m^3 にものぼり、これは主要な林業生産物となっています。一方広葉樹を中心とした天然林等の森林は1,500万haを占めるにもかかわらず、製材用素材の生産量は年間16万 m^3 にとどまり、160万 m^3 はパルプや燃料材として付加価値が小さいまま利用されています。広葉樹を中心とした森林は針葉樹人工林と異なり、様々な樹種で構成されてその立姿も様々です。もちろん更新方法も樹種により多様なため、私たち人間が計画したようには森林の管理が上手く進みません。逆にそういった要素が生物の多様性を生み出し、生態系としてのサービスの価値が高くなるといえます。

森林総合研究所では平成19年からこうした広葉樹の維持や誘導技術の研究を開始し、里山維持システムの構築や、未利用広葉樹の循環利用の方策、シラカンバの天然更新による低コスト施業方法等について研究を進めてきました。研究を進める中で、現在における日本の広葉樹の価値が低く見積もられているのではないかという疑問にたどり着き、森林総合研究所交付金プロジェクト「広葉樹利用に向けた林分の資産価値および生産コストの評価（令和2～4年度）」を開始しました。これからの日本の広葉樹林は美しい家具や石油製品の代替になる燃料材の供給源等として利用するだけでなく、適切に管理することにより十分に蓄積のある山を作り二酸化炭素の吸収源にする、多様性を活かした健康・環境・教育の場を提供するなど、新しい付加価値の創造が必要になります。またこうしたことは豊かな農山村の振興を図るために必要不可欠なことであると、私たちは考えています。本パンフレットがきっかけとなり、皆さんの周りにある何気ない広葉樹の林が宝の山に見えてくることを願っています。

森林総合研究所 研究ディレクター（林業生産技術研究担当）

宇都木 玄